

ほう げん れい ひ
房 玄 齡 碑

652?



宋拓本と近拓本の比較



本誌〈古典鑑賞〉課題の『雁塔聖教序記碑』は、褚遂良の楷書の代表作であるばかりでなく、初唐楷書の最高のものの一件である。流麗にして繊細、それでいて大胆である。楷書体でありながら行書のように流れるような筆致を示している。実に魅力ある書である。この碑は序碑と記碑の二碑からなる。序碑と記碑では書風が微妙に異なる。記碑の方がやや伸びやかであり、序碑のほうがやや緊張感を内に秘めた書風である。『雁塔聖教序記碑』と同じ書風の『房玄齡碑』ある。『房玄齡碑』の書かれた年代は、『雁塔聖教序記碑』とほぼ同時代である。この碑は現在も昭陵にあるが、碑面の文字は相当古くに人為的に壊されたようである。普通の拓本では、碑の上部五分の一ほどがどうにか原型を留めているだけである。しかし多くの字数を見ることができ、宋拓の見事な帖が一本だけ伝えられ、戦前からコロタイプ印刷で紹介されている。(原帖は所在不明である。)

図版に示したのはこの宋拓の写真焼き付け本である。『雁塔聖教序記碑』に比べて、書風・筆致の面でより優れていると評する人もいる。

近拓本

宋拓本

家鎮聞韶之雅俗曾
祖翼後魏宋安太守
龍爵壯武侯祖熊歷
清可盛出大時五拔
光

書道芸術院 第1回展 出品作家

堀 桂 琴

原稿依頼があって、60年を思ったとき、私の頭には何もない。まず飯島春敬編、書道辞典を開き75頁下段の記事をみつける。

明治40年11月15日山口県出身。本名 チヨ子、かなー丹羽海鶴、比田井小琴に師事。

毎日書道展審査委員、独立書人団名誉会員、桂会会長であった。書道芸術院史も調べた。

先生は、第1回展から審査員の任にあり第3回展まで任にあった。その後、院を去られ、独立の方で御活躍、平成14年逝去される。94歳でした。

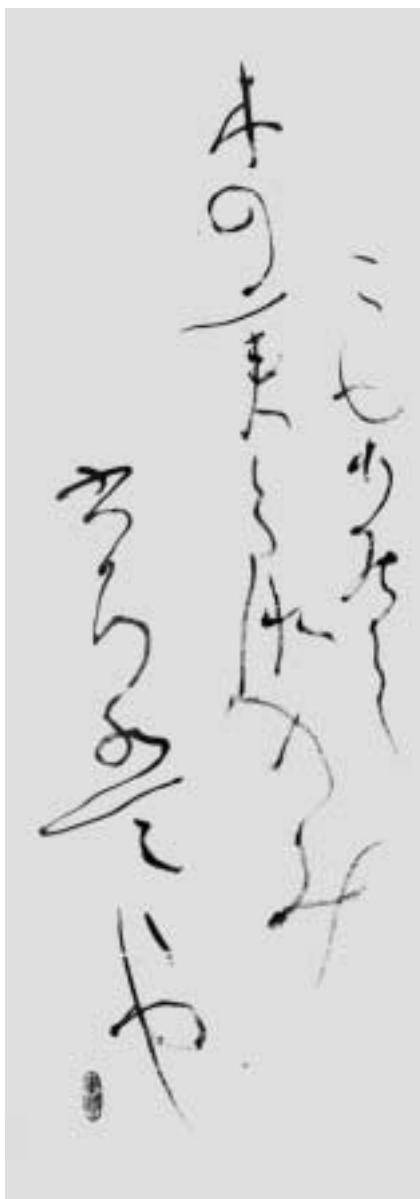
私が旧都美術館に加藤翠柳先生の手伝いで審査会、

展示に行った当時の情景が浮かんできます。香川先生と「石ろ」を囲んでお話しているようすが思い出されなつかしく思います。

当時の私には話の内容もお考え等、知るまでもない。お二人、熱の込めた対話をなさっていたようです。

ここに紹介した作品は68年の作です。大きさが見る者に安らぎを与え、背景には簡素に白黒の単体の美、連綿の美、墨つき、散らし、かなの美の四要素をすべて満たしていると思います。

(浜田一堂記)



こもりみて木の葉のまはりのみはるはばや

1968年

堀 桂琴書

書のひろば

理事長 恩地春洋

第60回毎日書道展の概要 (3)

◇毎日展人事

〈60回展運営委員〉

近詩 辻元大雲

大字 大野祥雲

前衛 浜谷芳仙

〈審査会員への昇格〉

漢字 半田藤扇 (規定による)

高田春来 特別選考

かな 大辻多希子

近詩 熊谷宗苑

大字 田中梨梢

石田春窓

萩原香扇

刻字 清水翠徑

加藤如石

前衛 三森慧香

真下京子

〈会員への昇格〉

漢字 大内熒軒 (規定による)

遠州翠湖 特別選考

横谷尚恵

かな 奥田瑞舟 (規定による)

和氣しげ代 特別選考

近詩 柿本紀子 (規定による)

(本院関係)

〈会友への昇格〉

漢字 加藤紫翠 小板橋伯穂 小宮

静舟 新行内芳蘭

かな 岩崎竹溪 小川彩香 小野梨

紅 利村郁子

近詩 井口静峰 伊藤翠心 梅澤四

洋 片山杏華 川崎小夜子

川野雅峰 蔵村登美 小谷俊

子 坂本龍水 佐々木豊艶

篠原誠華 篠原楊流 竹内彩

苑 武山桜子 西園隆舟 松

浦麗水 水野大祐 蜜波羅鳳

雲 山内桂峰

大字 新爽風 川村美泉 甲賀萌燕

永森千津 藤原聖美 宗秋箏

山中小華

刻字 大口豊山 北原富岳 千葉松

岳

前衛 阿部邑里 桑島有子 佐々木

みどり 鈴木智広 藤巻浄山

文部科学大臣賞に齋藤雨城さん

北海道書道協会(札幌、小原道道理
事長)主催の「第39回全道書道展」で
本院北海道支局長齋藤雨城さんが文部
科学大臣賞を受賞した。



齋藤雨城

一論あれば、百説あり

「月刊書道界」が、再び論争の種となっ
た。

11月号「論壇」の記事「公募書展の
格差問題」に事実誤認ありと、読売書
法会と読売新聞グループ本社が、発行
元の藤樹社と執筆者の田宮文平氏に謝
罪と訂正を求めた。

「読売新聞社賞も幹事が一定の人数に
達しないと審査にもかけられないとい
う」「この数年、日展体制の網をかぶ
せて組織を強化」の指摘に対し読売側
が、事実に対し誤解を招くと抗議した
ものだ。



「序」

東 素子

(春洋)

読売の幹部は「審査はしている」と
反論し、片や中小団体は「結果は指摘
どおり」だとする。
寄合所帯には絶えず陣取り合戦がっ
きまとう。(中略、似た話「新美術新
新聞」色いろ調 H15中止の件)
読売側も「反論」によって読者の意見
を聞いてはどうか。
それには過去、読売新聞社賞がどう
配分されたのか、詳細なデータを公表
すべきであろう。事実誤認ならば読売
側の筋が通る。同じく「論壇」で「特
定の団体内で談合の噂あり」とされた
毎日展は「論評に因与せず」と姿勢を
貫く。
(美術通信 H20・1・20より転載)
◇「書壇」とか「書道界」とかいわれ
るがすでに大衆的、国民的な文化の一
部を担う書である。自由な評論、自由
な論争ができる環境が望ましい。

現代詩文書 (五)

広瀬舟雲

私は、新しい横書きスタイルの現代詩文書を求めて実験を繰り返し、毎日展♣や芸術院展◆において発表しました。制作順に記すと次のようになります。



第53回書道芸術院展出品「龍2000」

広瀬舟雲書

- 1、「龍2000」◆
 - 2、「龍と俺の海」♣
 - 3、「Dancingパパ娘」♣
 - 4、「PAPAの響き」♣
- 漢字と平仮名交じりだけでは飽き足らず、漢字と数字を組み合わせて見たり、アルファベット・片仮名・漢字の3種類の文字の混合による調和を試みたりしました。記念すべき西暦二〇〇〇年は辰年!!
- 写真の作品は、漢字の「龍」と数字「2000」に右上へ昇るような動きを持たせ、天上に昇る龍の姿をイメージして揮毫しました。これは多分、出品作品選定の時、(奇抜過ぎて?) ポツになるだろうと思い、オーソドックスのものも合わせて書きました。師の種谷扇舟先生が何とおっしゃるか恐ろしくもあり楽しみでした。お見せすると、怒るどころかニコッとされました。「広瀬君は、また変な事をやって来た」と思われておられたに違いありませんが、私のこれから始まるいろいろな実験を積極的に後押ししてくださった師の厳しくも暖かいまなざしに感謝の気持ちでいっぱいでした。

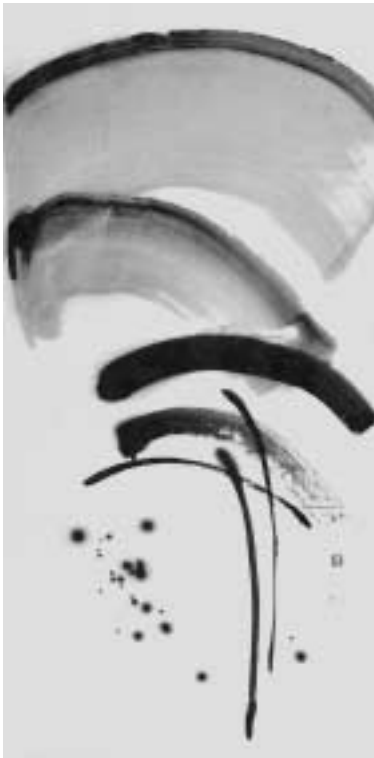
21世紀の書

—私の主張—

前衛書 (五)

阿部蕙芳

明治の文明開化の時代には、書道を芸術に入れるべきか否かと論争が起き、戦後は日展において伝統文化の書から、前衛書の動きを排除する時代があった。これは排除されても、止める事の出来ない時代の動きであり、残っていくか、消えていくかは誰にも解らない。前衛の宿命である。日本は平和と豊かさを得て、世界を見ることが出来るようになった。多くの日本人が外国の美術や



「歎息」

阿部蕙芳書

68×35cm

異文化に触れ、それを知り、自然を肌で感じ、心をも沸き立たす。感性向上の一因になると思います。大勢のお仲間と一緒する不安があったが、アイルランドの文字に敗けて、参加させていただきました。書芸院・創立60周年記念 アイルランド・ダブリン展。2007年3月。楽しい旅、レストランの入口で目の前の小枝に一羽の小鳥が止って出迎えてくれた。私達はつい小鳥の撮影会になったが、驚いた。彼はポーズを取り皆のカメラに顔を向ける。心から楽しい一時だった。作品はまだ見ぬ国、アイルランドに心を馳せ、書きました。(展示は軸装)

現代の書新春展

今いきづく墨の華

主催：毎日新聞社・(財)毎日書道会

和光ホール27人展 1月5日(土)~12日(土) 東京銀座・和光6階

セントラル会場100人展 1月5日(土)~13日(日) 東京銀座セントラル美術館

〈和光ホール27人展〉

〈捨〉

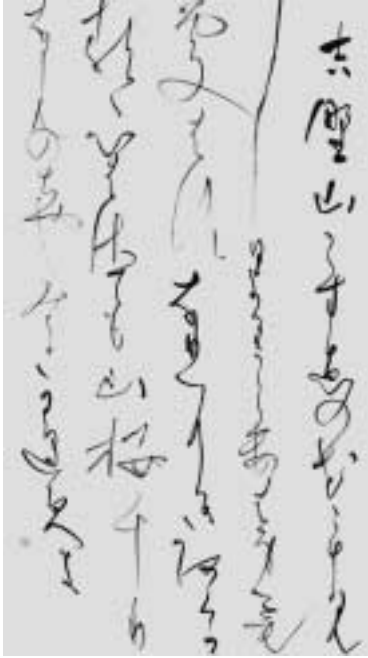


恩地春洋

70×100cm

〈セントラル会場100人展〉

〈吉野山〉西行「山家集」



石井明子

140×80cm

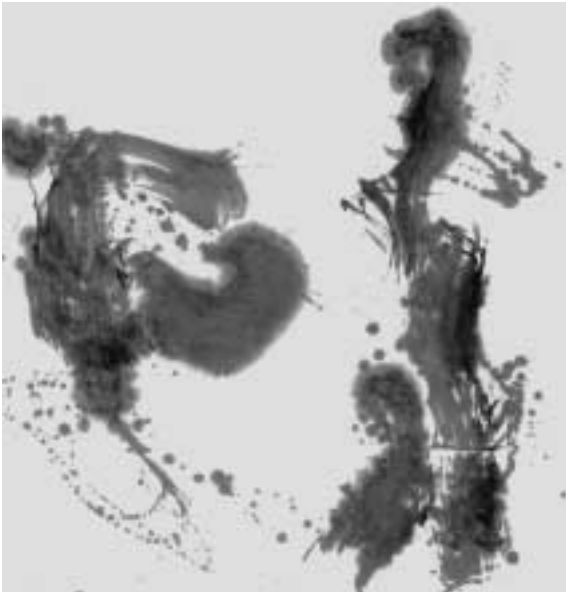
〈いづくしみ〉



村野大仙

97×165cm

〈尚〉



香川倫子

152×143cm

〈足跡の〉片山由美子の句



辻元大雲

170×110cm

特集：現代の書新春展

〈長谷川權の句〉

長谷川權「初雁」

砂本杏花



200×70cm

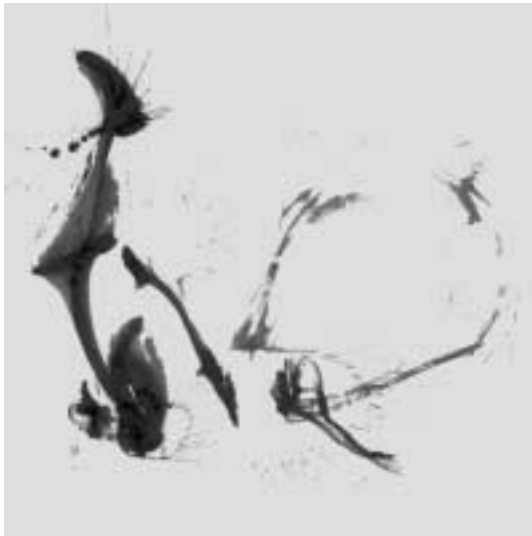
〈夢〉

小伏竹村



120×120cm

板垣洞仙



〈明による〉

150×150cm

飯高和子



〈子供が地球の未来〉
自作=カニューレの母と

138×70cm×2

漢字研究部

雁塔聖教序 (唐・褚遂良)

②

用紙 半紙普通判

|| 注 ||

漢字研究部競書作品は、左の法帖の中から

何文字臨書してもよい。

(掲載部分以外は不可)

※落款を必ず入れる

署名、もしくは

〇〇臨

(押印のみ可)

〈解説〉

褚遂良は、浙江杭州錢塘の人。字を登善という。

唐の太宗に仕え、書を能くしたので侍書となり、尚書右僕射などを拝した。

褚遂良の清剛な精神と知的で高雅な筆意が字間、

行間の余白に染みわたっている。

二つの碑石(序・記)は、同大同型の黒大理石で

方趺の上に建ち、高さ198cm、上幅85cm、下幅110cmと

底辺にいたり広がり安定感がある。

(編集部)



者。以其無形也。故知象顯可徵。雖愚不惑。形潛莫覩。在智猶迷。況乎佛道

用紙・半紙普通判(料紙可)

〈たて長に使用〉

・別紙を裁断して貼付は不可。

※落款を必ず入れる。署名もしくは〇〇臨(押印のみも可)

〈解説〉

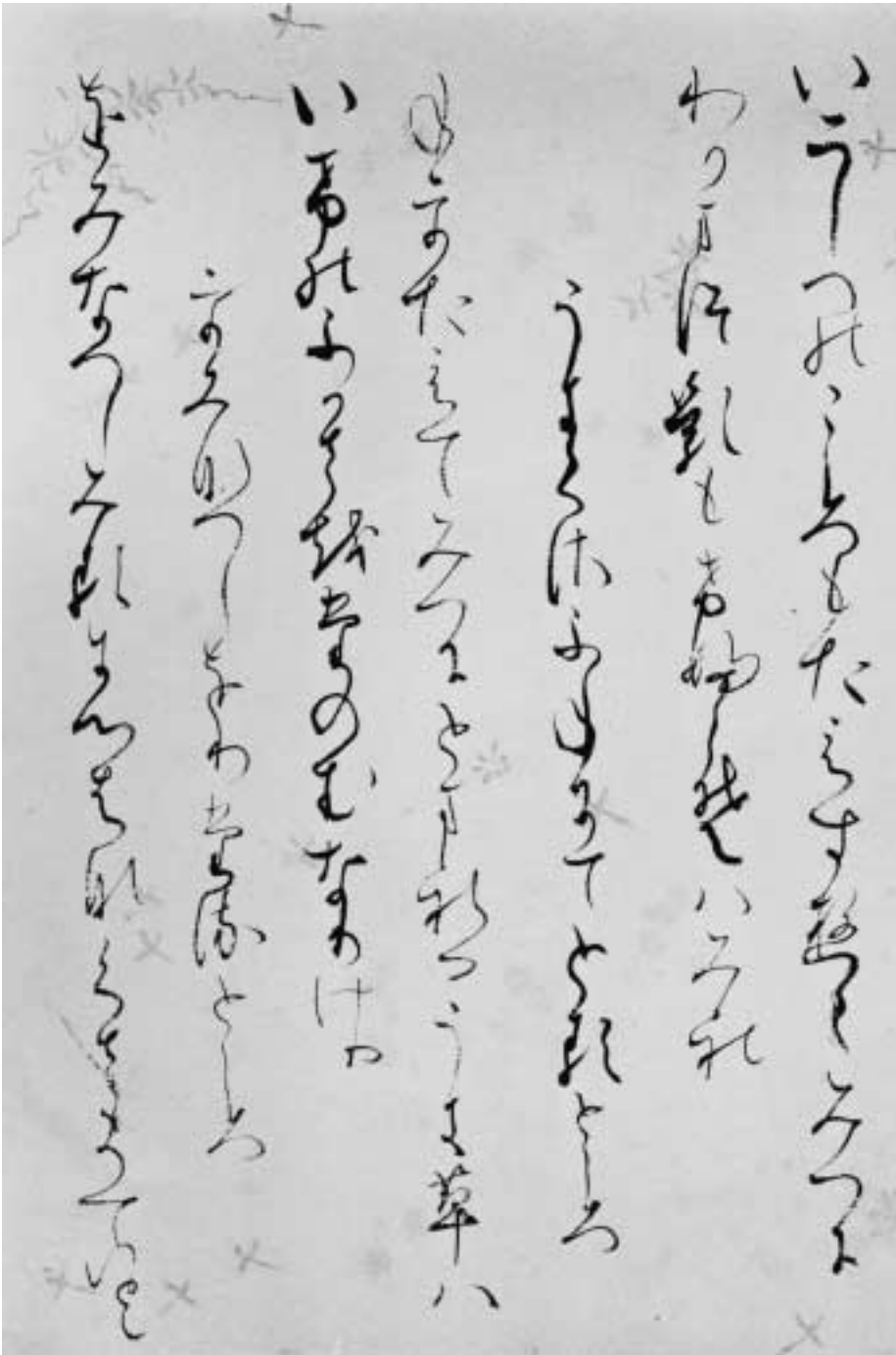
伊勢集は、一番枚数が多く、95枚もあるため、これを任せられた書き手は、20人の筆者の中でも特に秀れていたと思われる。また、枚数が多いだけでなく、さまざまな色の紙を用いた継ぎ紙が24枚と最も多い。

伊勢集は、貫之集下と合わせ石山切と呼ばれる。

〈よみ〉

いに(二)しへの(能)こゝろもたえずゆ(遊)く(久)みづに(尔)わが(可)ま(万)つ(徒)影もけ(希)ふ(婦)こそ(楚)は(八)みれ(礼)うき(支)く(久)さ(佐)ふね(年)に(尔)てとる(類)ところね(年)を(平)たえてみづに(尔)とま(万)れ(礼)るうき(支)草は(八)いけ(希)の(能)ふか(可)さを(越)た(堂)のむなり(利)けを(平)みな(那)へしをり(利)た(堂)る(流)ところをみなへしみる(類)に(尔)心は(者)な(那)々(久)さまでいと

※右の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)



(編集部)

漢字規定 初段以上 【三月二十日締めきり】 用紙 半紙普通判

最首翠風選書

習い方解説 (五)

最首翠風

啐啄同機
(啐啄同機)

今月は行書体です。「啐」は鶏の卵がかえる時、殻の中で雛がつつく音、「啄」は母鶏が殻を嘴で突き破ること。師と弟子のはたらきが合致すること。「啐啄同時」とも言います。

行書体は最も実用に適し、なじみ深い書体です。課題語句の木へんや他に「こんべん」「さんずい」などの省略法があります。行書古典中の白眉「蘭亭叙」や「枯樹賦」「争坐位稿」などを臨書しながら学びましょう。ポピュラーな古典も臨書するたびに新たな発見があるものです。

「啄」は「啄」でも可。



啐啄同機

よみ (啐啄同機)

書体 自由

漢字規定 秀級以下 【三月二十日締めきり】 用紙 半紙普通判

稲垣小燕選書

梅花呈秀色
秀色乃色
小燕

梅花呈秀色

よみ (梅花秀色を呈す)

書体 楷書

習い方解説 (五)

稲垣小燕

梅花呈秀色
(梅花秀色を呈す)

百花にさががけして咲いた梅は
すぐれた色を呈している。

凜とした強さの中に、可憐さも感
じられる梅の花、他の花よりも一
歩先きに開花する。その姿に憧れ
を抱きます。

自身の書もこの花のようであり
たいものと思いつつ……

日々研鑽を胆に念じています。
「花」と「色」の最終画に注意し
てください。



習い方解説 (五)

黒川 江偉子

むらぎもの心こころ染しも春はるの日にひ
鳥のむらがり遊あそぶを見れば
(良寛)

のどかな春の日にたくさんの小鳥が集まって遊んでいるのを楽しみ見ている良寛の歌。

昨夏、良寛の五合庵に行ってみました。木立に囲まれた険しい山の中のこの庵に20年も暮らしたと聞きました。その日々の中でこのような時が一番楽しかった事と思いい、この歌を選びました。構成は寸松庵色紙をイメージして書きました。

その時の良寛記念館で見た

君看雙眼色

不語似無憂

(君看よ双眼の色)

語らざるは憂い無きに似たり
の碑は胸を打つ遺墨でした。

よみ方

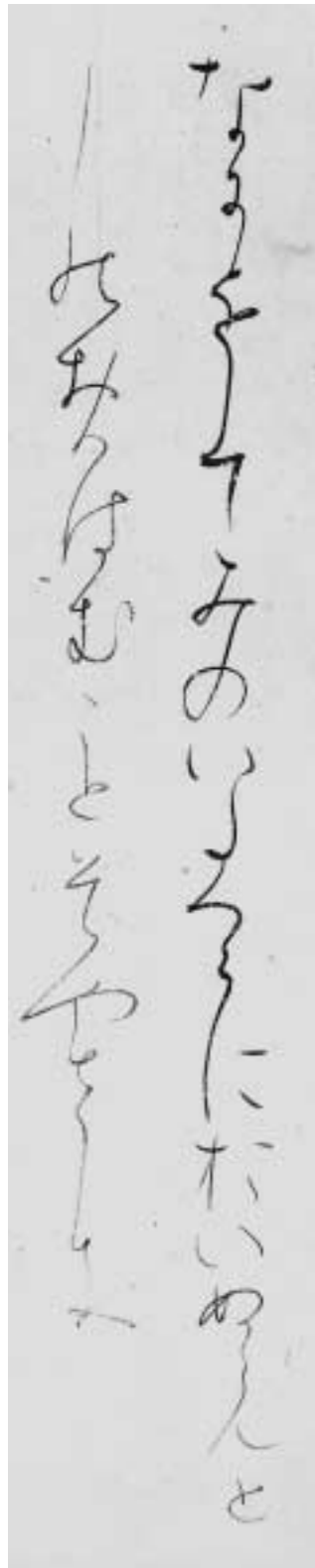
む(无)らぎ(文)も(毛)の心染しも春の日に(一)
鳥の(乃)むらが(可)りあそ(楚)ぶをみ(身)れ(連)ば(盤)

創作

かな規定 秀級以下 【三月二十日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 なに(示)をしてみのいた(多)づらにお(於)いぬらんと

しの(能)おも(无)はむことぞやさしき(支)

習い方解説 (二)

朝倉春江

梅が枝に降りつむ雪は鶯の羽
風にもちるも花かとぞ見る

(千載集)

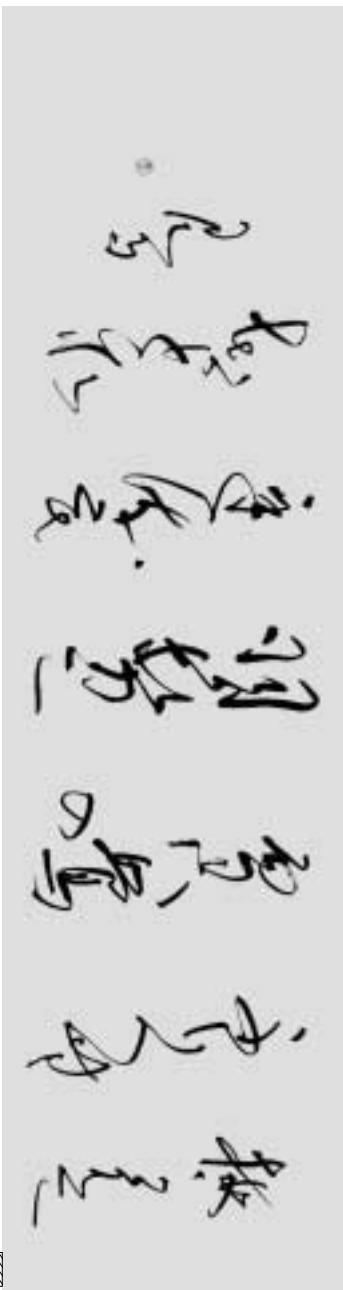
墨継ぎの位置は短歌横書きの場合、結句のみでなく、前半で行なうこともあります。この場合は書き出しで墨の量を少なく、三行目の後半で墨継ぎをしました。

行間が淋しくならないように横張りの文字を配置して行間の動きを考えました。

※よこ形式に限る

かな条幅規定 【三月二十日締めきり】 用紙 小画仙紙半切(料紙可)

朝倉春江選書



よみ方 梅が(可)えに(二)ふりつむ(無)雪は(八)鶯の羽か(可)ぜ(勢)に(二)

ち(運)る(流)も(毛)花か(可)とぞ(所)見る

創作

出品券
貼付位置

漢字条幅規定 初段以上 【三月二十日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

大野祥雲 選書

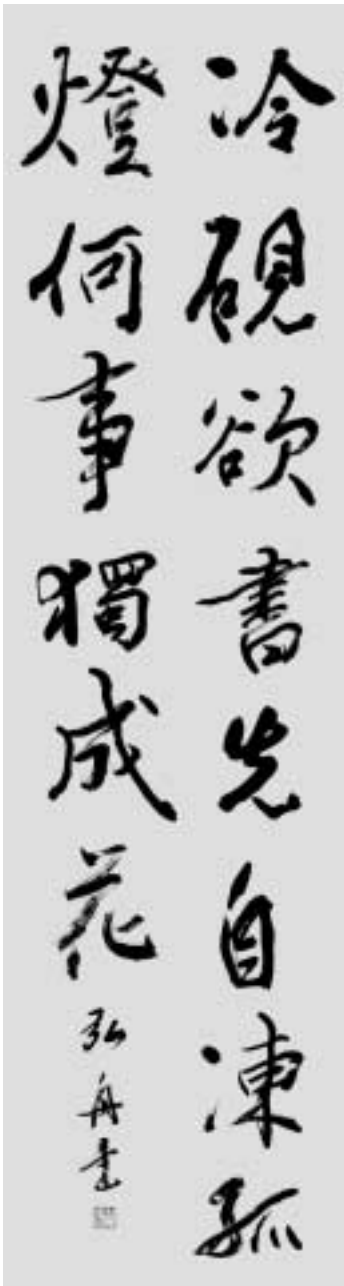


幽禽不見但聞聲 野草無名都著花
(幽禽見えず但聲を聞き 野草名なく都て花を著く)

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下 【三月二十日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

小川弘舟 選書



冷硯欲書先自凍 孤燈何事獨成花
(冷硯書せんと欲して先ず自ら凍る 孤燈何事ぞ獨り花を成す)

書体||自由

習い方解説 (五)

大野祥雲

「物静かに鳴く鳥は姿を見せず、ただ声を聞くばかり。名もない野への小草には残らず花が咲き誇っている。宋・范成大詩」

ここが見せ場とか山とかは考えないでごく自然に運筆。こうした作品は単調になりやすいので、気脈、上下の関係、左右、それに潤濁などに十分気を付けたいと思う。

習い方解説 (五)

小川弘舟

「書きものをしようとしたら、硯の水が凍っていた」冬の寒さが伝わってくる詩です。

今月は、楮遂良の行書と言われている枯樹賦を参考に書きました。楮遂良は晩年「雁塔聖教序」を書いています。線の変化、妙味はその片鱗が窺われます。速書させずにじっくり運筆してください。

ゆく河の流れは絶えずして
 しづもその水にあらず。淀みに
 浮ぶたかたは、かつ消えかつ結びて
 久しくとゞまうたる例なし。世の中に
 ある人と栖と、またかゝるものごとく。
 方丈記 書

用紙はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体は自由

習い方解説 (五)

阿部珠翠

今回は、鴨長明の「方丈記」です。鴨長明の生きた中世の人々には、このはかなさが愛されたようです。

現代の私達は、秋元 康作詩の

.....

ああ、川の流れのように

おだやかに

この身をまかせていたい

ああ、川の流れのように

移りゆく

季節 雪どけを待ちながら

.....

の方がピットリでしょうか。

ひらがなが、多い文章ですのであまり、力まず、流れに乗って書きました。

一行ごとの文字の切れ目や、各行の調和も大切にして、読みやすくするよう、ひらがなで調整しながら書くといでしょう。

※落款を入れ忘れないようにしてください。(落款は自分の名前を入れてください。)

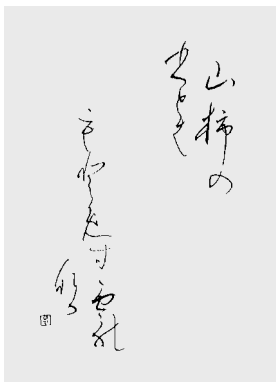
ホープ作品
各部総評

NO. 559

かな部 師範 治田 芳江

大らかな動き、字粒、字形のよさで華やかな作品となりました。丁寧な制作が好感度抜群です。

◎かな部総評 上級者の中にも、字の大きさが把握できず貧相な作品が目立ち残念です。手本だけに頼らず確かめる習慣を。(明子評)



かな条幅部 二段 酒井 恵子

これも藤棚形式の散らし方だが、強靱な線で行をなびかせ、押し寄せる波のような風情が逸格の趣き。

◎かな条幅部総評 鳴と変体がなの濃の誤字が圧倒的に多く残念でした。印刷による手本は解り憎い面もあるので確認を。(洋子評)

前衛書部 特選 大町菜緒子

直筆と側筆との調和を紙面全体に表現され、力強い線質で余白が生かされた作。印の位置に一考を。

◎前衛書部総評 いろいろ工夫された作品が多く楽しかった。さらに紙面全体への工夫を。(洞仙評)



漢字条幅部 師範 岩崎 蘆風

ま正面から隷書に対し、正攻法の学書で線充実して響が高い。基礎学習で時間がかかるが大切。

◎漢字条幅部総評 個性尊重の時代で、豊かな創造は大切だが、基礎的技術が不足すると俗に墮するので不断の学書が必要。(春洋評)

現代詩文書部 特選 今関 心華

歌いながら書いたのでしょうか。美しい淡墨で抒情豊かな作品。落款も見事です。

◎現代詩文書部総評 一作一作拜見することは、お一人お一人との楽しい対話の時間です。(蘭華評)



ペン字部 師範 近藤 松春

結体・流れ・大小・太細、文句なし。分間の白も明るく、紙面全体の余白も美しい。素晴らしい作品!

◎ペン字部総評 手慣れた感じで達者に早書きする作品がいくつもありましたが、じっくり詩文を味わって書いてほしい。(澄神評)

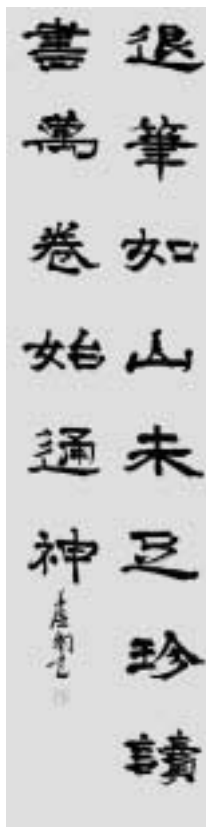
祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響あり 娑羅双樹の花の色

盛者必衰の理をあらはす。おどれる人も久しからず。唯春の夜の夢のごとし。猛々者も遂には滅びぬ。偏に風の前の塵に同じ。
平家物語より 松春書

漢字部 師範 高橋 侑豊

運腕大きく強いリズムの草書。切れ味よく明快な運筆は修練の賜か。さらに深みある表現を期待。

◎漢字部総評 上級者に草書表現が多く見られたが字形、線質の甘さが目立つ。基礎的な学習、古典臨書からの鍛錬を。(大雲評)



今月の

特別研究部優秀作品(特選)

現代詩文書
(翠苑)

佐々木 豊 苑
「橋本徳寿の歌」

前衛書
(蓮紅)

浅野 彩 紅
「祈る」



佐々木 豊 苑 書
172×49cm

◆ねっとりとした超濃墨で筆を振り払うように運ぶ。シンプルな構成だがリズムの浮沈で線の太細が蠢く。その蠢めきで白が輝き異彩を見る。(洋子評)

◆気迫の直線が余白に響いて全体を統制する。呼吸の短い文字構成が鋭さを生むが、字形の不自然さも残している濃墨の処理に「工夫ほしい」。(春洋評)

◆長鋒二本組の表現か、破筆と潤筆とがリズムを奏で、余白を鮮明に感じさせてくれる。文字造形にやや不安定なところあり、さらに研究を。(大雲評)

◆濃墨の重さを線の太い細いの変化で軽やかに次々と移っていく筆さばきに目をみはる。次回はもう少しゆったりした作品も見せて欲しい。(倫子評)



浅野 彩 紅 書
178×61cm

◆紙の大きさに負けず遅しい筆力が大いに生かされている。構成も余白の白さが交互に表現され紙面に無理のない効果をあげている。(倫子評)

◆二層紙にやや宿墨の味わいある淡墨の潤濁が効果的に生かされ、迫力と変化ある表現となった。下部の線少し整理省略されればと感ず。(大雲評)

◆まず、非常に知的な作品だと思った。上下のバランス、多彩な線に墨色美と破綻がない。欲を言わせてもらおうとどこか息の抜ける部分も…(洋子評)

◆墨溜りの深さと動きがこの作品を深くしている。下部の濁筆はやや硬くなっただのはリズムを崩したからではないだろうか。大作として堂々。(春洋評)

総評

今月は78点(漢13、か7、現27、前29、篆2)の応募がありました。用紙サイズを毎日展公募サイズ以内に変更してから二回目となり、大きな用紙で大胆に創作された作品が見られるようになりました。特に前衛部門に意欲的な作が目につきました。以前までの半折の限られた形式から、用紙が変わったため、表現形式も自由になります。多彩な作品が寄せられることを期待しています。漢字、かな部門は従来の形式での出品作が大半でした。伝統的な部門ですが、現代性を盛り込んだ、創意溢れる作品が寄せられることを大いに期待します。(萬城)

〈特選候補者〉

漢	八街	三浦	鄭街
漢	玄穹	大和	星華
漢	八幡	馬場	寿舟
漢	玄穹	渋谷	一紅
漢	玄穹	石森	光琴
漢	游水	荒川	空華
現	炎佳	佐藤	華炎
現	白珠	工藤	永翠
か	恵雅	板橋	雅邦
前	詢扇	小林	澄子
前	杏苑	松永	杏苑
前	東総	伊藤	玉苑
前	清流	渋谷	充律



佐藤希雲刻
〈原寸大〉

篆刻

〔大雲〕 佐藤希雲

「氣象萬千」

◆ 白文四文字の布字は概ね安定し、堂々の作。「氣」やや窮屈な感あり、右下への払いの画に切れの甘さがあるが、明快さと充実感を買う。(大雲評)

◆ 篆書の味わいを表現して豊かさがあってよい。特に「萬」は堂々として風格がある。「氣」硬く、「象」「千」の下部のまとめ一工夫。(春洋評)

◆ ゆったりした表現が見る者の気分豊かさを与えてくれる。廻りの処理の事になるが、赤の部分が強く残るので何かいよいよ手を。工夫を考えて。(倫子評)

◆ 重厚な線で気満さに溢れ、丁寧な表現。縁の処理が少々硬いかと思うが、全体に安定感のある仕事振りで、押印方法も美しい。(洋子評)

◆ 軽く気どらないで自然な動きは作者のねらいだろうが下部はしまりがなく未完という感じがする。線と構成の工夫がこれからの課題か。(春洋評)

◆ 推稿を重ねるのであろうが、作意的なものを感じさせない自然な動きで、しかもその動きに無駄がない。墨量と白の配合に魅せられる。(洋子評)

◆ 紙面が大きくなって思う存分の活躍を得て淀みのない表現が出来る。筆の運びによって墨色が変化する面白さがあるので構成に注意を。(倫子評)

◆ 上部から下部へのうねるような筆致にエネルギーを感じる。下部やや軽くもう少し存在感がほしかった。もっと大胆な取り組みを期待。(大雲評)

〔前衛書〕 (四谷) 藤島美砂子 「たわむれ」



170×45cm

藤島美砂子書



70×136cm

千葉紅雪書

漢字

〔玄穹〕 千葉紅雪

「沙羅双(雙)樹」

◆ 荒々しいと感じる筆の表現だが、一気に書きこむ流れがそれを打ち消してくれ一つの作品としてのまとまりが出て見る者に明るさを感じさせる。(倫子評)

◆ 青墨の宿墨かと思ったらポスターカラーだとのこと。突き込んだタッチが「沙」の余白を捉えて絶妙。滲まない紙は線が浅くなるので注意。(春洋評)

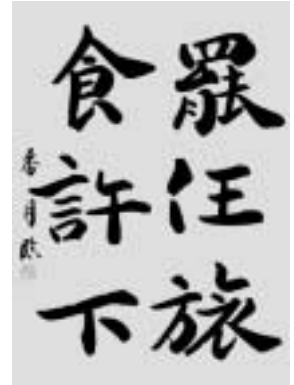
◆ 横形式に四文字配置は全体に偏平な構成となるが、墨溜りの濃淡と大胆な渴筆が立体感を与えて妙。落款印のみはシンプルだが押印場所一考。(大雲評)

◆ 前衛的なめり込むような線に惹かれた。やや造形が整いすぎたかとも思うが、墨色、タッチとも発想の雄々しさに表現する強い意志を想う。(洋子評)

漢字研究部
(薦季直表)

選評 村野大仙

今月のホープ作品



細 谷 香 月

漢字研究部 特選 細谷 香月
 原本を慎重に観察し細部にわたってその精
 度は極めて高い。運筆も沈着丹念、一貫して
 いて心の乱れが無い。巧みさよりもその精神
 性に共感を覚える作である。自分の目に自信
 を持って感性を高めてください。

◎漢字研究部総評

皆さんこの課題は余り書いた事のない古典
 のかなと思えました。作品を拝見して何か

すっきりしない思いが残り歯がゆく感じまし
 た。この古典は造形上も線の量感等も比較的
 特徴の捉えやすい表情をしていると思います
 がどうですか。また書者の目が原本から全く
 離れ、そろって別な手本を見て書かれたと思
 われる作品もありました。それも一つの勉強
 法かもしれませんが、書いた作品の文字と、
 原本の文字とをじっくり見比べて自分の目で
 確かめてみる勉強もなさることを切望します。

我衆作 氣

我衆作 氣 旬月
我衆作 旬月之 湖廓清 蟻取當時 實用故 山陽太守 關內侯 李直之 菜 趙期成書 永十 臨

充 臣 愚 欲

當時實 用故山

我衆作 氣 旬月

不羨 徒先帝 賞 以封爵 以制節 今直 罷任旅食 許下 素為廉 史衣食 不充 臣愚 欲

旅食許 下素為

成 尅 期 事

授以 劄郡 今 直 罷 任 旅 食 許 下 素 為

充 臣 愚 欲

趙期成事不羨 徒先帝賞以 封爵以制節 以 制節今直 罷任旅食 許下素為 廉史衣食 不充臣愚 欲

旅食許 下素為

我衆作 氣 旬月

我衆作 氣 旬月

放 喪 臘 我 衆 作 清 蟻 取 當 時 實 用 故 山 陽 太 守 李 直 之 關 內 侯 李 直 之

旅 食 許 下 素 為

趙 期 成 事 不 羨 徒 先 帝 賞 以 封 爵 以 制 節 今 直 罷 任 旅 食 許 下 素 為 廉 史 衣 食 不 充 臣 愚 欲

先 帝 賞 以 封 爵

旅食許 下素 為廉史衣食 不充臣愚欲

我衆作 旬月之所 齋清蟻 取當時實 用故山陽 太守李直 之菜趙期 成事不羨 徒先帝賞 以封爵以 制節今直 罷任旅食 許下素為

今直 罷 任 旅 食

今直 罷 任 旅 食

以 劄 郡 今

劄 郡 今 直 罷 任

紫香 章華 泉江 炎城

青郁 山子 美由 彩

和節 虛美 湖笑 翠園 舟華

玉僊 柳都 子紅 苑露

書道芸術院創立60周年記念

役員作品巡回展

併催 四国支局展

会期 平成19年11月20日(火)～11月25日(日)
会場 高知市文化プラザかるぼーと

立冬が過ぎても秋日和が続いていた南国土佐。ところが、巡回展・支局展が始まるころから急に冷え込み、高知市でも3.8度を記録する日もあった。幸い、好天に恵まれ、800名近い方々に鑑賞していただいた。

巡回作品の前衛は、高知では見る機

会が少なく、一際目立ち、作品の前で立ち止まり首をかしげる姿もあった。

地元は、参与会員から一般公募入選者までの63名が出展。審査会員による大作5点をはじめ、素材も大きさも自由。今年の準大賞、菊花賞作品も加えて多彩。恩地理事長からは、「気合い



巡回展解説

恩地理事長



かな実技講習

下谷洋子先生



〈高知新聞記事より〉



の入った支局展だ」とのお褒めをいただき嬉しく思う。

報道では、まず高知放送が放映。次に高知新聞が社会面へ。毎日新聞は地域パーク一面二分一掲載。本院の内容や活動が県民のみなさんにご理解いただいたと感じている。

24日の午後、恩地理事長の作品解説。「作品は何を書いているかより、何を感ずるかが大切」と、前衛書を中心に、作品を見るきっかけを約一時間お話しした。引き続き、千葉蒼玄先生が、135×210サイズの画仙紙に揮毫してください、聴衆から拍手喝采。この時の解説と揮毫については、25日付毎日新聞こうち地域ニュースで報道された。

祝賀会は尾崎仁水審候の名司会で行。恩地理事長の主催者挨拶。支局長挨拶。続いてご来賓の三氏から祝辞をいただく。藤戸謙吾・高知新聞社社長。田中白歩・独立書人団参事。井上脩身・毎日書壇会関西支部長。次に依岡紫峰・常任総務より、ご来賓(5名)、県内



前衛書

千葉蒼玄先生揮毫

書道団体代表(7名)、業者(2名)、遠路お越しくださった本院役員(5名)の方々をご紹介。ここで、半田久米夫・高知放送社長の「乾杯」のご発声で祝宴に入る。透かさず、香川倫子派遣理事より、「高知の方も前衛書を学ぶと、作品が変わってくるのでは」と、温かい励みになるお言葉をいただいた。

25日は下谷洋子、前田まさ美の両先生を講師、助講師にお迎えし、仮名実技講習会を実施。50名の受講者から好評を博した。

今回の巡回・支局展は川島舟錦・四国支局事務局長を中心に、会員一人一人が責任をもって進めてくださった。それに各界のご支援、ご協力もあって、盛会裏に終了。関係各位に厚くお礼を申し上げ、報告いたします。

(四国支局長・大野祥雲記)

書道芸術院創立60周年記念

役員作品巡回展

併催 北海道支局展

会期 平成19年12月4日(火)〜12月9日(日)
会場 札幌ギャラリー大通美術館B室

○北の拠点都市札幌の中心部において、北海道では、四回目的の移動展を開催。併せて北海道支局展も開催された。
この季節は零下続きの厳寒。多彩多様な作品群が札幌に開花。市民の注目を集めた。

○心配——「会場と作品」のレイアウトに、はじめ支局展カットか、二段掛けさえも考えた。しかし、地元我妻緑巢会長の「昌文堂」さまが、急遽、L字型パネルを提示され、難は去る。
40数年前、加藤翠柳先生が北に一粒の種を播かれ、その後種谷扇舟先生は三度来道され、力をいただいた。

○突如——初日、大先達の浜田一堂先生、堂光先生が会場へ、全く突如としてお越しになり、大粒の涙の中で堅い握手を交わされた。会員感無量。

○入口には、大輪の花が。ダブリンの大ボスターと院のメッセージ。北海道書壇には見られない作品群開花。全国最小軍団の会員が、まさに「流汗悟道」で体当たりの開会まで漕ぎつけた。

「祝還曆」——大書された恩地理事

長はじめ、辻元、大野両先生の御来道は院展審査直前に、御来道。この朝、毎日新聞には%大を飾る『辞林』に堂々と掲載。道書壇を「あっ」と言わせた。祝賀会計画はなく、そして、
○「小宴」を——北の書のサミットと



浜田一堂・浜田堂光両先生

開幕一番のりく東北総局より

会場にて



道書道連盟理事長藤根凱風先生、全道展理事長小原道城先生、評論家唯一人の佐藤庫之介先生、加えて雅子妃殿下のハーバード大客員教授で直接担当された小川東洲先生など。

○天の驚きか——同時期、「北玄20人展」(金子鷗亭先生創始の)にトークショーで来日の船本芳雲先生も。雨城は、初当審(毎日)のとき、審査主任だった。会場で会員と共に堅い握手を。「邂逅」。北の冬をテーマの支局も成功した。15名の会員と「うれしくて、ありがたくて、ガンバルヨ」と誓い合った。院の皆様には感謝を捧げます。

(北海道支局長

齋藤雨城記)

称して、この夜、ススキノの近くで、中央三巨頭と道書壇代表が会した。来年は洞爺湖のサミット。コンサドーレのJ1昇格、そして今夜の宴——そこには日本の北の書と中央との合体が。
○来場者実に50名——創玄会長中野北溟先生、高風会理事長島田無響先生、

書道芸術院創立60周年記念役員作品巡回展、総局・支局13会場の報告が今回をもちまして終了しました。

競書出品規定

締切日 3月20日
規定部

部門	字	漢	な	か	漢字条幅	かな条幅	ペン字
段級位 用紙	初段以上 半紙	秀級以下 半紙	初段以上 半紙	秀級以下 半紙	初段以上 半切	10師 級	10師 級
書体・内容	創作 (書体自由)	創作(楷書)	創作	臨 書 (写真掲載部 分を全て書く)	創作 (書体自由)	創作 (書体自由)	書体自由

●前衛書部 審査会員は
現代詩文書部 出品不可
半紙縦使用に限る、一人一点
(両部門に出品できる)

●研究部(審査会員は出品不可)

部門	漢字研究	かな研究
出品資格	審査会員 候補以下 (審査会員 は不可)	審査会員 候補以下 (審査会員 は不可)
用紙	半紙	半紙
書体・内容	掲載の古典 の臨書、文字 数自由(掲載 部分以外の 箇所は不可)	掲載の古筆 の臨書、歌 一首以上を 書く、全文 も可(掲載部 分以外の箇 所は不可)

●特別研究部(審査会員も出品可)

特別研究作品	出品資格	用紙	内容
誰でも 出品可 (審査会 員を含む)	毎日展 公募サ イス以 内	2× 6尺以 内	漢字・かな・ 現代詩・篆 刻・前衛書 の各部門を 含んだ創作 作品競書 (篆刻は印 影に落款を 入れて応募 ※各部を通 じて一人 一点)
「特別研究作品」出品券を貼付 ※バーコード出品券は使用で きない	可縦横 自由	刻字は不可	

●出品資格 高校生以上

●月例競書作品出品の心得

- 一、締切日必着厳守
- 二、月別出品券を貼付していないバーコード券は認めない
- 三、月別出品券のコピーは不可
- 四、(一)初めて出品のときは「新」
(二)回目出品のときは「10」
(三)〇印は昇級
(一級上の級を書く)
- 四「締切後着」・「段級不明」・
「課題違反」・「落款なし」
の作品は審査対象外とし、氏
名を掲載しません。
※▲印段級誤記入

バーコード出品券についてお願い
* 作品からはがれないように、右下
にしっかりと貼り付けてください。
* 月別出品券の部別を間違えないよ
うに貼ってください。
(※スティックのりははがれやすい
ので、ヤマトのりを)使用ください。
* 記入する数字は、
級位は算用数字1、2、3…
段位は漢数字 初、二、三…
で書いてください。
* 級位の方は、出品する月の本誌
(最新号)で成績を調査確認の上、
級を記入してください。確認できな
いときは、現在級を書き「未調査」
と明記してください。

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は

101-0031 東京都千代田区
東神田一―一六―一七
神田芝崎ビル三階

財団法人書道芸術院

電話(〇三)三八六二―一九五四
FAX(〇三)三八六二―一九五七

お問い合わせ、ご連絡は、
月曜日～金曜日九時～十七時の間に
お願いします。(土・日・祝日は休み)

送 料

- 一か月の購読部数
1部～9部までの一回の郵送料
10部以上は送料免除
- | | |
|----|------|
| 1部 | 68円 |
| 2部 | 84円 |
| 3部 | 92円 |
| 4部 | 100円 |
| 5部 | 116円 |
| 6部 | 124円 |
| 7部 | 140円 |
| 8部 | 148円 |
| 9部 | 156円 |

平成二十年一月二十五日印刷
平成二十年二月一日発行
定価 一部 六五〇円

編集兼 恩 地 春 洋
発行人 恩 地 春 洋
発行所 株式会社リンクス
印刷 小沢写真印刷株式会社
発行所 財団法人書道芸術院

〒101-0031 東京都千代田区東神田一―一六―一七
電話(〇三)三八六二―一九五四
FAX(〇三)三八六二―一九五七
振替 〇〇一四〇一―三三〇五八
http://www.jlincs.co.jp/shogai/